The Japan Lung Cancer Society

定の意義

長崎大第1外科　安武　亨
田川　泰,宮下光世,石川　啓
原　信介,岡田代吉,辻　博治
岡　忠之,川原克信,綾部公懿
富田正雄

stage Ⅰの原発性非小細胞性肺癌119例について検討した．T1N0では縮小手術例と定型手術例とでほぼ同様の予後が得られた．T2N0では縮小手術例が有意に予後不良であった($p<0.05$)．核DNA量について検討すると，T2N0のdiploid症例では縮小手術例は定型手術例と同様の予後を得たが，aneuploid例では縮小手術例は有意に予後不良であった($p<0.05$)．よって，T2N0のDNA aneuploid症例は可能な限り縮小手術は避けるべきと考えられた．

82．肺癌と凝固異常

国病九州がんセンター呼吸器部
川崎雅之,清水哲哉,近間英樹
麻生博史,久田友治,本広　昭
一瀬幸人,原　信之,大田満夫

肺癌症例119例における入院時凝固機能検査を検討した．血小板数で31.1%，フィブリノゲンで41.3%，FDP-Eで21.6%に異常を認めた．それらは病期の進行とともに上昇する傾向を認めた．また組織学的には扁平上皮癌で腺癌よりもフィブリノゲンが高値をとる傾向にあった．また3カ月以内に死亡した症例の凝固機能では，FDP-Eが高値をとる傾向にあり線溶系の活性化が示唆された．

83．肺癌組織におけるHLA-抗原発現の検討

長崎大第1外科　岡田代吉
田川　泰,安武　亨
横田美登志,草野裕幸
遠近裕宣,岡　忠之,辻　博治
原　信介,謝　家明,川原克信
綾部公懿,富田正雄

肺癌細胞のHLA-抗原発現の，進行度・分化度による変化と，それに対するTILの反応を切除肺癌45例の組織染色にて検討した．

HLA-ABC抗原はstage Ⅰ，Ⅱで発現する頻度が高く，TILが増加する傾向があり，早期肺癌で，宿主免疫系の反応が示唆された．また，HLA-DR抗原の発現は，組織型による差が著明で，stage Ⅰ，Ⅱ・高分化型腺癌で均一な発現が見られ，腺癌の分化や進行性と関連している可能性が示唆された．

84．肺腺癌におけるTGFαの発現の意義

九州大第2外科　立石雅宏
金子　聡,矢野篤次郎
光冨徹哉,石田照佳,杉町圭蔵

肺腺癌138例について，transforming growth factorα（TGFα）を免疫組織化学的にABC法にて検討した．TGFα陽性率24%以下を弱陽性群25-74%を中等度陽性群，75%以上を強陽性群の3群に分類したところ強陽性群67%，中等度陽性群14%，弱陽性群19%で，性分化度，根治度，病期別に差を認めなかった．5生率は強陽性群40%，中等度陽性群70%弱陽性群60%で，病期別にⅢA期で強陽性群の予後が不良であった．よって，TGFαは肺腺癌の進行癌において予後不良因子と考えられた．

北海道支部

□第15回 日本肺癌学会 北海道支部会

平成元年9月16日(土)
第一製薬ビル講堂(札幌市)
当番幹事　浅川三男
(札幌医大第3内科)

1．肺の紡錘細胞型扁平上皮癌と考えられた1例

北海道大第1内科　原田真雄
清水　透,宮本　宏,阿部庄作
川上義和
同　第2病理
得地史郎,藤岡保範

症例は77歳男性．左肺S^{1+2}に径約7cmの腫瘤影があり対側縦隔リンパ節腫大を認めた．種々の検索にても確診がつかず，原発性肺癌と考えて化学療法を行ったが効果なく脳転移を来たして入院後4カ月の経過で死亡した．

剖検では，原発巣は多形性を示す紡錘細胞のみから成り，同部より扁平上皮への分化を示す証拠は得られなかった．しかし広範な全身転移巣の中で，膵転移巣のごく一部において扁平上皮癌巣が島状に認められた．

2．高アミラーゼ血症を呈した肺癌の1例

国療道北病院内科　藤内　智
島谷尚樹,藤田結花,辻　忠克
大木康生,佐々木信博
清水哲雄,坂井英一
旭川厚生病院内科　井門　明
旭川医大第1内科　大崎能伸
小野寺壮吉

肺癌が異所性ホルモン産生能を有することは少なくないが，アミラーゼ産生肺癌は本邦では

NII-Electronic Library Service